

琉球史研究をめぐる四〇年

高 良 倉 吉

一 はじめに

周到な準備もなしに、ぶつつけ本番のような形になることを覚悟のうえで、特に一九六〇年代末以降の琉

球史研究の基調的な推移を述べる仕事をお引き受けし

た。いわゆる史学史や研究史の総括という厳密な手法

で説明するよりも、細分化の度合いを加速させている

琉球・沖縄研究の他分野の方々に対しても、歴史研究分

野の動きとそのポイントを平易に語ることが今必要だと

と考えたためである。したがって、あらかじめお断り

しておきたいのだが、以下に述べる叙述は、語るべき

多くの論点の中から私なりの独断で選択的に提示する

状況認識の一端にすぎない。分かりやすさという点を考慮して、まずは私自身の小さな状況について解説することから始めたい。

私が琉球史の研究を志し、本格的な勉強を始めたのは一九七〇年前後のことであつた。大学の卒業論文のテーマは「沖縄原始社会論序説」（一九七一年提出）であり、その後「沖縄原始社会史研究の諸問題——考古学的成果を中心に」と改題して『沖縄歴史研究』十号（一九七三年）に発表した。六年間の日本本土での勉学生生活に終止符を打ち、一九七三年三月に沖縄に戻り、同年四月から沖縄県沖縄史料編集所の職員として『沖縄県史』編集事業の最終段階（文化編の補助、通史編の執

筆、別巻の責任編集など)に参画することができた。職場に収蔵されている様々な資料を読むかたわら、多良間島を始め県内各地で史料調査を行うと同時に、機会を得て二度にわたり東南アジアを旅することもできた。そのような仕事や活動を行つていた時期に出会ったのが安良城盛昭という歴史研究者であり、私は弟子のような気分で様々な機会に彼から多くのことを学んだ。

安良城との交流が大きな刺激の一つになつたと思うが、同じ時期に、私は三本の論文を相次いで発表している。「古琉球辞令書の形式について」(一九七八年三月)、「琉球処分と朝鮮・東南アジア」(同年五月)、そして「八重山キリシタン事件について」(同年六月)である、やや自覚的に古琉球・近世琉球および近代沖縄を対象とする論文を書いた。そしてまた、主に七〇年代後半の二〇歳台に営んだささやかな仕事を『沖縄歴史論序説』(一九八〇年)や『沖縄歴史への視点』(一九八一年)に収録すると同時に、琉球史像の認識に関する基本的な見通しについて『琉球の時代』(一九八〇年)を書いた。

右に述べた経緯に見るよう、琉球史研究者として私の基礎は七〇年代から八〇年代初頭にかけての時期にほぼ出来上がつたのだが、今振り返ると、そことは至極当然の成り行きだつたのだと思う。

二 先端的状況としての近代史研究

私が勉強を始めた七〇年前後の時期は、一言でいえば、高い水準の近代史研究が琉球史研究分野を牽引していた時代であり、その担い手は日本本土の大学や大学院で歴史関係諸学を本格的に学んだ若手の戦後世代の人材であつた。金城正篤・比屋根照夫・我部政男・西里喜行・西原文雄・安仁屋政昭・仲地哲夫などの名が代表するその新しい研究動向は、琉球史のありようそのものを大きく刷新しつつあつた。

このうち、金城・西里・西原・安仁屋・仲地に上原兼善・島尻勝太郎・金城功・田港朝昭を加えた面々は沖縄歴史研究会を組織しており、二年余の共同研究をふまえて『近代沖縄の歴史と民衆』(一九七〇年)を出版していた。近世末期の問題や琉球処分をめぐる実態、宮古島人頭税廃止運動、土地整理、近代糖業、移

民と出稼ぎ、労働社会運動、先島差別の構造そして伊波普猷論など、近代沖縄史の主要な論点を取り上げたところの画期的な論文集であり、明らかにその時期の研究水準や気運を代表する成果であった。同年に琉球政府から刊行された『沖縄県史 第一卷 各論編一 政治』は、近代史総説を西里が（目次に島尻勝太郎とあるが実際の執筆者は西里）、明治維新と沖縄および初期県政を金城正篤が、自治の展開過程を田港が、大正・昭和期の県政を大田昌秀が執筆しており、大田を除く面々は『近代沖縄の歴史と民衆』（以下『歴史と民衆』）の中心メンバーであつた。二年後の一九七二年に刊行された『沖縄県史 第三巻 各論編二 経済』も同様であり、総説を田港が、近世の経済構造を金城正篤が、旧慣体制を西里が、経済の近代化を田港・金城功・福仲憲・野原全勝が、不況期と経済再編を安仁屋・仲地がそれぞれ執筆している。つまり、『歴史と民衆』とその展開的な歴史叙述に相当する『沖縄県史』（以下『県史』）の近代政治史・近代経済史を通じて、七〇年前後には近代沖縄に関する本格的な歴史論が高い水準に立つて提示されていたのである。

右の研究グループには加わらず、独自の立場で自由民権論と沖縄の関係を思想史的に追及していた比屋根の研究や、日本近代国家の形成に連動する問題としての沖縄を政治史的に検討していた我部の仕事などを含めると、その当時の近代史分野は量的にも質的にも他の時代分野の研究を圧倒する状況を形成していたのである。そのような新動向を目にしつつ、先輩研究者たちの先端的な歴史論を吸収しながら、では、自分なりのテーマをどのように設定できるのか、そのことが強く問われる時代だつた。

近代史研究の高揚には少なくとも三つの条件があつたと思う。一つは、琉球処分から沖縄戦までの近代沖縄を対象とした『県史』全三四冊の編集事業であり、その事業を通じて様々な諸資料が収集され、その主なものが『県史』資料編に収録されることであり、同時にまた、事業推進の事務局として沖縄史料編集所（琉球政府立、日本復帰後は県立）が存在していたことである。沖縄歴史研究会の事務局は史料編集所にあり、学生時代の私も編集所で資料を何度も閲覧し、研究会の例会にもしばしば参加できた。二つは、近代史研究の

担い手たちが本土の大学や大学院で歴史関係諸学を本格的に学んだ人材だつたために、様々な意味で、日本歴史学の研究水準や方法を琉球史に適用できたことであろう。それ以前までの研究者の多くが独学で地歩を築き、市井の民間学・郷土史研究の担い手であつた状況に比べると、近代史研究の担い手たちは高等教育を受けた専門家であり、大学や文化機関に席を置く身分を確保していた。

三つは、彼らが研究を志した頃の時代背景である。日本から政治的・行政的に分離されアメリカの軍事的な直接統治下に置かれていた沖縄の現実を直視しつつ、そのような時代や状況において歴史研究を行うことの意味を問う点で彼らの問題意識は共通していた。沖縄は何ゆえに日本であるのか、どのような経緯で日本になつたのか、日本になつた後の状況とは何であつたのか、なぜアメリカの統治下にあるのか、なぜ日本への復帰を要求する運動が展開するのか、という問い合わせを根底に秘めたとき、彼らの関心が琉球処分とその後の近代沖縄のプロセスの追求に向かつたのは当然だつたといえる。

ようするに、一九七〇年前後の近代史の高揚は琉球史研究の水準を大きく引き上げると同時に、沖縄における歴史研究のあり方を含めて、その後の研究動向の起点をなしたという意味において、銘記すべき位置を占めている。私が琉球史研究を志した時代とは、そのような動向がすでに現出した段階であつた。

三 安良城盛昭の参画とその意味

近代史の研究に比べると、前近代史分野は著しく立ち遅れていたといえる。伊波普猷や真境名安興・東恩納寛惇といった研究者の著作や論文、あるいは戦後になつて、その成果を提示した仲原善忠・比嘉春潮らの著作が依然として重視される状況が風靡しており、近代史のような水準の研究は稀有な状況下にあつた。漢文史料の検討を得意とした島尻勝太郎・嘉手納宗徳らの仕事や、近世史を本格的に検討していく渡口真清・喜舎場一隆らの個別論文、あるいはマルクス主義歴史学の理論を下敷きにして琉球前近代史を概論した新里恵二『沖縄史を考える』（一九七〇〔一九六一〕年）などが目に付く程度であり、『歴史と民衆』や『県史』政

治編・経済編のような体系性を帶びた歴史論はまだ提示されていなかつた。

「高い近代史、低迷する前近代史」という構図において、東京大学を辞めて沖縄大学に席を移し、琉球史研究に本格的に参入してきたのが安良城盛昭であつた。安良城は一九七五年に沖縄に居を構えるや、精緻な文献研究と共に精力的なフィールドワークを展開しつつ、琉球史研究の現段階を刷新することを意図して批判的な議論を展開し始めた。研究水準を代表する近代史上の主要な論点、例えば琉球処分論や旧慣温存論などに関する認識を批判すると同時に、その批判的検討のメスはそのまま前近代史をめぐる諸問題にも向けられた。沖縄在住時代の彼の議論をあつめた『新・沖縄史論』（一九八〇年）をひもとくと、第一部で琉球史認識の視点や方法に関する概括的な問題を取り上げた後で、第二部において古琉球辞令書や進貢貿易、地割制度などの前近代史の問題を論じ、第三部では琉球処分や旧慣温存などの近代史の論点を俎上にのせており、全体を通じて先行研究に対する批判的な検討を加えつつ、そのうえで独自の認識を対置するという基調に彩

られていることが分かる。

安良城の批判に対しても、当然のことながら旧慣温存期の認識をめぐる西里喜行の反論（『沖縄近代史研究——旧慣温存期の諸問題』一九八一年）などがあつたが、私が特に注目したのは、史料的な根拠や確かな事実認識に支えられた前近代史論の必要性を安良城が訴えたことであり、同時にまた、近代史・前近代史上の個々の問題を鋭く問い合わせらも、それらをふまえつつ、琉球史全体を貫く基調を歴史像として、どのように構築できるかという強い意志を持つことの必要性を彼が訴えていた点である。安良城自身は近代史と前近代史を同時に扱うこと自覚的に追求しており、そのような視野に立つ琉球史論を彼は精力的に提示していたのである。

ここで強調したいのは、一九七〇年代後半から八〇年代初頭にかけて沖縄を舞台に活動した安良城の仕事や主張を通じて、それ以前にすでに高い水準を獲得していた近代史研究と低迷を続ける前近代史研究とが同一の場で語られたこと、その結果として近代史の水準が前近代史の側に「輸出」されたことであろう。言い

換えると、近代史と対話できるようなレベルで前近代史を語ること、そのうえで琉球・沖縄という地域像を歴史の側から提示し続けることの大しさが明らかとなつた。私が一九七八年に古琉球・近世琉球および近代沖縄に関する三つの論文を相次いで書き、八〇年に『琉球の時代』で古琉球論を中心とする琉球史像の展望を述べたのは、近代史と対話できる水準の前近代史論を構築したいという思いからであり、そのような自觉が持てたのはもつぱら安良城の問題提起に起因している。

その時期の動向として今一つ注目しておきたいのは、一九七六年に挙行された伊波普猷生誕百年記念事業のことであり、近代沖縄の時間を生きた彼の活動の意義とその業績の意味を問うムーブメントがいわば大同団結的に推進された。近代という時間に属する伊波をめぐる問題と、彼の主要な業績である前近代史に関わる問題とがこのイベントを通じて同一平面において話題となつた。言い換えると、近代沖縄を語る対象としての伊波と、彼の主要な業績としての前近代論の継承と批判とが、沖縄にとっての琉球・沖縄研究の意義

を確認するイベントを通じて「社会化」されたのである。安良城の問題提起はその渦中で行われたものであり、それゆえにインパクト効果の高いものとなつた。したがつて、安良城盛昭の仕事と伊波普猷生誕百年記念事業は、琉球前近代史を本格的に研究したいと志す動きのいわばターニングポイントであつたといえる。私の『琉球の時代』もそうだが、琉球・薩摩双方の諸史料を駆使して琉球・薩摩関係（琉薩関係）像を描き始めた上原兼善『鎖国と藩貿易——薩摩藩の琉球密貿易』（一九八一年）や、系図家譜の制度とその史料的な価値を論じ始めた田名真之『琉球家譜の成立とその意義』（一九七九年）などは、こうした前近代史追求の気運を示す新たな動きであつた。

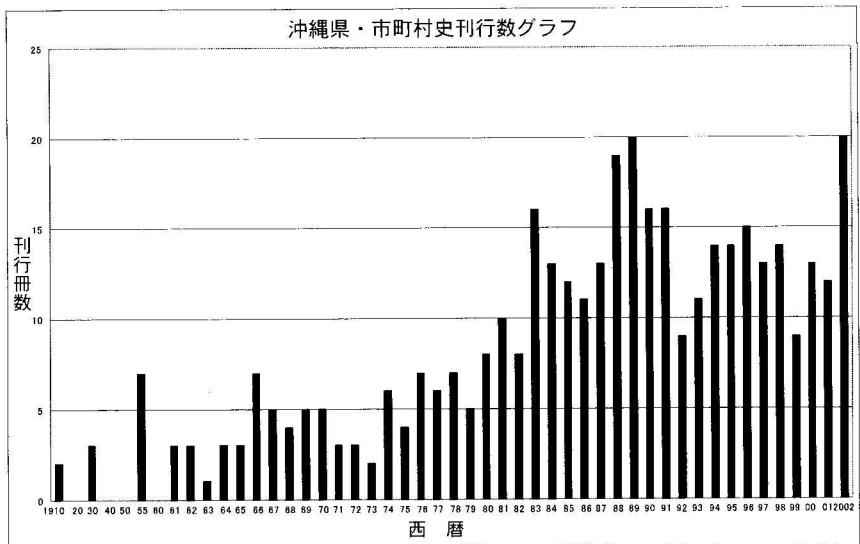
四 「地域史」という動向

「安良城ショック」を通じて近代史と前近代史が対話できるようになつた一九八〇年代以降、琉球史研究は基本的に二つの方向において展開する。一つは琉球・沖縄に関する歴史像をその内部に沿つて精緻化すること、つまり沖縄を構成するところの地域という主体を

実証的に捉えようとする動きであり、もう一つは琉球・沖縄に関する歴史像をアジアという視野をふまえつつ捉えようとする動きであつた。いわゆるニワトリの目（内部・地域の視点）とワシの目（アジアの視点）の双方で琉球・沖縄を観察し、その成果を新しい歴史像として提示する動きが活発化し始めた。

内部・地域の視点に立つ動きは「地域史」というキーワードで説明できる。

一九六〇年代中頃に始まつた『沖縄県史』や『那覇市史』の編纂事業を嚆矢とし、七〇年代における一定の動きを経た後で、県下市町村における歴史編纂事業は八〇年代に入ると飛躍的な進展を見せるようになつた。その状況は刊行冊数の経年的な推移を示した図に見る通りであり、八〇年代以降の時代がいかに際立つた特徴を有する時代なのが判る。この動きは事業主体である県や市町村にとつては文化事業の一環であるが、歴史研究の側から見ると琉球史像をその地域に即しつつ各論的に展開するという仕事であると同時に、地域に関する諸資料を本格的に蓄積するプロジェクトでもあつた。この事業を担う当事者を中心に組織され



た沖縄県地域史協議会（沖地協 一九七八年結成）は八〇年代に入ると活発な活動を行うようになるが、その状況は地域史編集が琉球史研究を牽引するというその時代性を反映している。

ところで、地域史の動向は少なくとも三つの意味をもつ。一つは、先行する『沖縄県史』『那覇市史』（以下『市史』）の成果を発展的に継承したことであろう。『県史』と『市史』はそれぞれ編集事務局と編集委員会を持ち、資料編・各論編を主体とする長期的な刊行計画方式のもとに進められたが、事業規模の程度や職員の身分上の問題（嘱託・臨時など不安定な雇用形態）などの差はあつたものの、八〇年代の地域史もまた『県史』『市史』と同様の推進方法に基づいて実践された。特記したいのは資料編の充実という方式であり、『県史』が近代新聞記事を抽出して資料編三冊を編んだこと、沖縄戦に関する住民の証言集二冊を編んだこと、統計資料集一冊を編んだこと、各論編に民俗編二冊を配したことなど、そのいざれも後に続く地域史において踏襲された。二つは、大学で歴史学や民俗学・方言学・文学・社会学などを学んだ若手の人材が事務局身

分の形で地域史編集に関わることを通じて、琉球・沖縄研究の人的な基盤が大きく拡大したことであり、その隆盛ぶりは沖地協の活動に如実に反映された。三つは、この事業を通じて地域に関する多彩な資料や情報がそれぞれの地域に蓄積されたことであり、先の地域史人材の台頭とあわせて従前には見られなかつた新たな状況が生まれた。この動きは地域史の事業分野のみならず、各市町村における八〇年代以降の文化施設整備（図書館・博物館・美術館などの建設）にも連動していたのであり、浦添市史編纂事業の成果と蓄積が浦添市立図書館にストックされたのはその象徴的な事例といえよう。

この時期に私も地域史編纂事業に積極的に関与しており、浦添市・沖縄市・宜野湾市・嘉手納町・読谷村・宜野座村・渡名喜村・多良間村・伊是名村などにおける歴史編纂事業に深く関わった。

地域史と琉球前近代史の関係について言うと、まずは地域史料の発掘と利用が格段に進んだことを挙げたい。『平良市史』は宮古前近代史に関する基本史料を収録し、『多良間村史』は同島で保存されてきた多彩な古

文書類を資料編において紹介した。銘苅家文書を翻刻して紹介した『伊是名村史』、島に残る近世文書を紹介

した『渡名喜村史』など、研究者の目に触れることが少なかつた諸史料が相次いで刊行されるようになつた。地域に目立つた前近代史料が残存しない他の多くの市町村においては、『おもうさうし』や『球陽』、『近世地方経済史料』、系図家譜、「琉球資料」（京都大学所蔵）、碑文記などの諸史料から地元関係の記事を抽出し、それに解説を加えて紹介する資料編スタイルが流行した。このスタイルの嚆矢となつたのが『浦添市史』第二巻（一九八一年）であり、沖縄戦において潰滅的な被害を被つた地域、同時にまた前近代史史料の残存が限定されている地域における資料編の編集のあり方に明確な方向性を与えた。沖縄全体にわたる前近代史の史料を刊行してきた『那覇市史』もこの動きを促進する形で、久米村や那覇・泊、首里系の系図家譜を始め『歴代宝案』や「琉球資料」などを資料編として刊行している。琉球前近代史を考えるための情報は地域に即して発掘・提示され、また、地域に即して確認・評価されたのである。この流れは続く一九九〇年代に

も踏襲され、今日に続く大勢となつてゐる。

今一つ注目したいのは、地域史編集事業が数多くの前近代史専門家を育てたことだろう。地域を中心に関わる人材は時代や分野を問わず幅広い知識が求められるのが常であるが、そうだととも、地域に即して前近代史を扱う仕事を背負うことになつた人材たちがその職務を通じて、同時にまた個々人の研鑽によつて前近代史に関する相当の知識・認識を身につけることとなつた。沖縄タイムス社が刊行した『沖縄大百科事典』全四冊（一九八三年）や『角川日本地名大辞典・沖縄県』（一九八六年）にすでにその兆しは明確に見えているが、『日本歴史地名大系四八・沖縄県の地名』（二〇〇二年）段階になると、その書における地域前近代史の執筆者の多くは地域史関係者である。つまり、その地域の前近代史は当該地域をテーマとする何某に聞け、という構図が八〇年代の地域史隆盛を通じて形成され定着したのである。

さらに注目すべきは、情報と人材を蓄積した地域史の動向が、琉球前近代史像の下請けとしての地域の歴史という構図を断ち切り、地域の多様な現実を総合化

したものとしての前近代史像の構築という課題を提起したことだろう。山原や宮古・八重山などの問題を意識する琉球史像構築の課題を突きつけたこと、それぞれの地域からいわゆる全体史を展望する必要があること、そのような地域の主張と自負が地域史編集事業を通じて提示されたのである。八〇年代後半から浦添市が単独で始めた『琉球王国評定所文書』全十九冊（一九八八～二〇〇二年）の刊行は、琉球史像構築に向けて発信された地域の気概を象徴するところの事業であつたといえる。

五 アジアの視点、琉球王国という視点

アジアという存在を視野に容れた琉球前近代史の追求は、いうなればプロジェクト型・イベント型方式を主体に推進された点に特徴がある。高良『琉球の時代』（一九八〇年）の提示を承けて沖縄タイムス社が八〇年代を通じて大々的に企画・実施したところの「大交易時代企画」は、琉球・アジア交流史というテーマを各種のシンポジウムやスタディーツアーなどを通じて追求し、その成果を紙面展開して県民に広くアピールし

た。沖縄側と福建側の専門家が初めて膝を付き合わせて行つた福州シンポジウム（一九八五年）や、福建の専門家を初めて沖縄に招いて行われた浦添シンポジウム（一九八八年）などの開催はそのキヤンペーン成果の一つであつた。ようするに、このムーブメントにより、沖縄の歴史や文化を考える目線が急速にアジアに開かれたのである。

そのいっぽうで、沖縄と台湾の研究者の交流事業も始まつた。一九八六年には第一回中琉歴史関係国際学術会議が台北で開催され、その後は隔年ごとに那覇と台北の交互で開かれるようになつた。この会議にはやがて沖縄側のイニシアティブにより福建や北京の専門家が加わるようになり、開催地も福州や泉州、北京にまで拡大した。各会議の成果は主催者の責任で論文集としてまとめられ、那覇・台北・福州・北京でそれぞれ出版されている。

その流れは、沖縄側をスポンサー（当初は沖縄銀行、その後は首里城公園を管理・運営する海洋博覧会記念公園管理財團）とする、北京の中国第一歴史档案館所蔵の琉球・中国関係史料の影印本（原文書を写真製版して印刷

したテキスト）を刊行する『清代中琉関係档案選編』シリーズにつながった。そしてまた、沖縄県教育委員会が主管する歴代宝案編集事業にも展開し、県教委と档案館の交流協定の締結を始め、相互の関係史料の交換やシンポジウムの開催、成果論文集の刊行が実現するようになった。ようするに、中国を始めとするアジアは、現今の沖縄にとつてもはや抽象的な相手ではなく、共通のテーマを目指すネットワーク上の具体的な存在になり始めたのである。

こうした国際学術交流の主なテーマが琉球と中国、琉球とアジアの関係史だったために、その成果はもっぱら琉球前近代史研究を活性化することにつながった。中国側諸史料の活用はもとより、研究者間のネットワーク形成を含めて、琉球史研究は八〇年代を通じていわば国際化したことになる。

今一つ注目したいのは、アジアの視点を重視する琉球史の問題が実は琉球王国論に連動していたことであろう。安良城盛昭『新・沖縄史論』（一九八〇年）は薩摩侵攻以前の古琉球における琉球の国家としての独自性を強調し、その独自的な存在が薩摩侵攻や琉球処分

を契機に段階的に日本国家に編成された点を提示したが、高良『琉球の時代』も安良城の論に依拠して古琉球国家の独立性を高調し、琉球前近代史を捉える主要なキーワードとして「琉球王国」論を力説した。安良城が先鞭をつけた辞令書研究を継承した私は、古琉球辞令書を素材に古琉球がいかに独自の国家的な存在だつたかを検証する試みとして『琉球王国の構造』（一九八七年）を書いたが、その中で提示したかつたのは、琉球は、外に対しても中国を始めとするアジア諸国との関係性において存在するものの、内に対しても徹底して独自の政治的・行政的な存在だつたことを歴史像の骨格にすべきだという主張であった。

アジアとの交流を重視し、交流する主体としての琉球王国が強調されたとき、琉球前近代史は、「中国を始めとするアジア諸国と深い交流関係を持つ琉球王国」という独自の存在が展開した時代」というイメージで捉えられ、巷間に流布するようになる。この流れに首里城の復元（一九九二年に開園）やNHK大河ドラマ「琉球の風」（一九九三年放映）などのトピックスが加わったとき、八〇年代を通じて喧伝された琉球前近代史像

は、「アジアの中の琉球王国」として内外にアピールされるようになった。

六 一九九〇年代以降、今日まで

近年の新しい動向として誰の目にも明らかなのは、琉球前近代史の分野におけるいわば『ニューウェイブ』ともいべき成果が相次いで刊行され始めた点であろう。その旗手ともいいうべき豊見山和行や真栄平房昭らは、琉球前近代史の研究が本格的に立ち上がる一九七〇年代後半から八〇年代にかけて、学部や大学院で歴史学を学び、琉球史研究の新動向を吸収しながら、同時にまた日本歴史学の最新の研究動向とも接触しつつ成長した研究者であつた。彼らの基本的なスタンスは、琉球前近代史像をより厳密なレベルにおいて再構成すること、琉球前近代史を孤立した独自の問題として扱うのではなく、幕藩制国家論やアジア海域史論という多相なシステム、あるいは広汎なネットワークにおいて捉え返すという試みであつた。豊見山や真栄平が主導した前近代史に関する歴史叙述、例えば『北の平泉、南の琉球——日本の中世』五（二〇〇二年）、

『琉球・沖縄史の世界——日本の時代史』十八（二〇〇三年）、『沖縄県の歴史』（二〇〇四年）、『琉球・沖縄と海上の道——街道の日本史』五六（二〇〇五年）などを見ると、琉球史像はより深く、より豊富になつた。

この新動向は、八〇年代の前近代史叙述のいわば集大成的な普及版に相当する『新琉球史』古琉球編・近世編二冊（一九八九—一九九一年）に起点を持つ。その企画の中心に位置したのは私だが、池宮正治・田名真之・上原兼善・梅木哲人・田里修・黒島為一・里井洋一などおなじみの書き手の他に、田中健夫・村井章介・紙屋敦之といった本土側の執筆者が加わっているが、

意欲的な論文を数多く投じたのがほかならぬ豊見山と真栄平であった。そして、紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』（一九九〇年）登場以降の本土の先端的な歴史研究者たちによる琉球史分野への積極的な関与や、『幕藩制形成期の琉球支配』（二〇〇一年）に結実する上原兼善の地道な研究などが刺激となつて、琉球史研

究はより深い進化のプロセスをたどるようになる。ようするに、琉球史研究は本土で営まれている中世史や

近世史の研究と対話できるような水準を獲得し始めたのであり、九〇年代を通じてその成果を精力的に吸収し発信したのが豊見山と真栄平なのであつた。

九〇年代はまた、考古学の方法を基礎に置きながら、文献研究をも援用して琉球史研究に斬新な問題を相次いで提起した安里進が活動した時代でもあつた。

安里のデータ処理については考古学分野内部の吟味が必要であろうが、それはともかく、彼が果たした最大の功績は文献研究の手の届かない古琉球の形成過程とその初期段階について明快な見通しを提示することにより、琉球史像構築のうえでのいわばエアーポケットともいえる時代の像を仮説として埋めて見せたことだろ。琉球諸島を取り巻く古代の段階から説き起こし、この諸島の独自化のプロセスをめぐる諸状況を提示するとともに、独自化のいくつかのステップを描き出すことを通じて、安里は琉球史像そのものがありようを刷新して見せたのである。豊見山・真栄平らが主導する新しい琉球前近代史の叙述は、安里が提示し続

ける原琉球論・古琉球論を前提とする形で展開されている。

琉球史をより厳密に扱うという姿勢、同時にまたより多様な諸状況に連動させつつ捉え返すという態度に基づく傾向は、新しい世代の研究者の参画を得て今後加速されることになるはずである。

最後に、私自身の状況に少々触れたうえでこの拙い文章を結びたい。

私は八〇年代を通じて展開した地域史や「アジアの中の琉球王国」のアピールに深く関与したが、やがて八〇年代後半から本格化する首里城復元に大半のエネルギーを費やすことになつた。建築・土木・美術工芸・考古・民俗祭祀など各分野の専門家たちと協同で推進されたプロジェクトであり、その一角に歴史研究者として参加したのである。往時の施設空間の約半分が復元された首里城は、一九九二年十一月から一般に公開されているが、復元作業のほうは今なお引き続き行われており、依然として私はそのプロジェクトの一員である。田名真之が主導した北京故宮博物院蔵の琉球国王献上品展覧会（一〇〇四年）や、安里進が主導した「浦

添ようどれ」（二〇〇五年四月一般公開）の復元・整備

の場合などもそうであるが、琉球前近代史には「プロジェクトとしての追求」という側面があり、そのテーマの意義をどのように語るかという問題については別の機会にゆずりたいと思う。

しておきたい。

高良倉吉『沖縄歴史論序説』一九八〇三一書房
高良倉吉『沖縄歴史への視点』一九八一沖縄タイムス社

高良倉吉『琉球の時代——大いなる歴史像を求めて』一九八一

○ 筑摩書房（八九年新版、ひるぎ社）

高良倉吉『琉球王国の構造』一九八七吉川弘文館

沖縄歴史研究会〔編〕『近代沖縄の歴史と民衆』一九七〇沖

縄歴史研究会（七七年増補版、至言社）

『沖縄県史』全三四冊の内訳は資料編一冊、各論編一二冊、

通史編一冊、別巻（沖縄近代史辞典）一冊

新里恵二『沖縄史を考える』一九七〇勁草書房（内容は一

九六一年に沖縄タイムス紙に長期連載されたもの）

安良城盛昭『新・沖縄史論』一九八〇沖縄タイムス社

西里喜行『沖縄近代史研究——旧慣温存期の諸問題』一九八一

沖縄時事出版

『伊波普猷生誕百年記念事業報告集』の概要は「沖縄学を民衆の中へ」一九七七伊波普猷生誕百年記念会（沖縄）事務局

上原兼善『鎖国と藩貿易——薩摩藩の琉球密貿易』一九八一

参考文献

本文で言及した文献に関する必要最小限の情報を以下に記

八重岳書房

田名真之『琉球家譜の成立とその意義』『沖縄史料編集所紀

山「編」『琉球・沖縄史の世界』二〇〇三吉川弘文館）などをご参照いただきたい。

要』第四号一九七九 沖縄県史料編集所（田名『沖縄近世史の諸相』一九九二ひるぎ社収載）

南西地域産業活性化センター『沖縄県における地域歴史書刊行事業の成果とその意義』二〇〇三 南西地域産業活性化センター

入間田宣夫・豊見山和行『北の平泉、南の琉球——日本の中世五』二〇〇一 中央公論新社

豊見山和行〔編〕『琉球・沖縄史の世界——日本の時代史十八』二〇〇三 吉川弘文館（豊見山を始め安里進・真栄平房昭・田名真之等の論文を収録）

安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭『沖縄県の歴史——県史シリーズ 四七』二〇〇四

吉川弘文館（企画・編集の中心は豊見山）

豊見山和行・高良倉吉〔編〕『琉球・沖縄と海上の道——街道の日本史五六』二〇〇五 吉川弘文館（企画・編集の中 心は豊見山）

豊見山和行・高良倉吉「歌と踊りの豊富な八重山に移つてきて十年の

節目に受賞し感激している。毎日八重山の歌と踊りに触れていることで、この賞をいただけたと思つてい

る」と感慨深げに語った。

氏は「歌と踊りの豊富な八重山に移つてきて十年の

節目に受賞し感激している。毎日八重山の歌と踊りに触れていることで、この賞をいただけたと思つてい

る」と感慨深げに語った。

『新琉球史』は全四冊で古琉球編（一九九一 琉球新報社）、

四講談社

近世編上（八九年）、同下（九〇年）、近代・現代編（九二年）紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』一九九〇 校倉書房

上原兼善『幕藩制形成期の琉球支配』二〇〇一 吉川弘文館

（たから くらよし・琉球大学教授）

（二〇〇五年四月二二日 編集委員会受理）

◆トピックス

二〇〇五年十一月、第二回八重山毎日文化賞（八

重山毎日新聞社主催）の受賞者（正賞三名、奨励賞一

名）の発表があり、沖縄文化協会会員の飯田泰彦氏が

奨励賞に選ばれた。同賞は八重山研究や八重山の芸術

文化の振興に貢献した人へ贈られるもので、飯田氏は

竹富島の狂言について論じた「狂言『烟屋の願い』に

関する考察」（『沖縄文化』九八号収載）や「八重山諸島

の狂言資料抄」など、八重山の芸能研究が評価された。

氏は「歌と踊りの豊富な八重山に移つてきて十年の

節目に受賞し感激している。毎日八重山の歌と踊りに触れていることで、この賞をいただけたと思つてい